成人の儀―特別侍従―　サンプル

ヒュース王国　憲法第二十四条　婚姻

一項　婚姻は双方の純潔によって認められる。

二項　婚姻中に純潔を失った場合は、離縁しても他者と婚姻することはできない。

三項　これら条項は、男女間の婚姻にのみ適用される。

ヒュース王国　直系継承伝　機密一条

一項　王子として生まれた者は成人の儀によってのみ、成人を認められる。

二項　成人の儀は、相手役・特別侍従の後孔への子種の注入によって行い、王や宮廷長官をはじめとする立会人の確認によって終了する。

三項　成人の儀について知る者は、決して他言してはならない。

四項　特別侍従は必ず男でなければならない。また、その男根を失うこととなるが、本人とその家族が不自由なく生涯を過ごせることを保障する。

1．ヒュース王国・最北の地

家が潰れてしまうのではないかと思うほど降り積もっていた雪がとけ、外に出たケネルの頬を柔らかい風がそっと撫でた。玄関の前には小さな緑の芽が地面からぴょこんと顔を出し、春の到来を喜んでいるように見える。

（いい天気……）

両手を天に突き上げて体を伸ばし、深く息を吸う。

なんとか今年も無事に春を迎えることができた。去年の夏から父が病に臥(ふせ)せっていたので、じゅうぶんな薪を用意することができなかったのだ。

ケネルは家の外壁に張り付けた防寒用の藁を丁寧に外すと納屋に片付け、玄関ドアから呼び掛けた。

「母さん、水を汲んでくるね」

「ああ、ありがとう」

腰の悪い母に代わって日に三度、村の中心にある井戸に行く。あかぎれでぼろぼろになった手で台車を押していると、通りかかった広場で村の男が声を張り上げるのを聞いた。

「城から知らせが来たぞぉ！　レフィナード様が特別侍従を求めているそうだぁ！」

城から遠く離れたこの田舎で、第一王子の名前

を聞くのは珍しい。それにわざわざこんなところにまで侍従を求めて来るとはいったい何事だろうか。

（しかも特別侍従って何だろう……？）

自分のような学もない人間が召し抱えられることはない。そうとわかっていても気になってしまい、ケネルは耳をそばだてて男の声を聞いた。

（明日、午後の一刻に広場の噴水前……）

翌日のその時間、ケネルは広場の植え込みの陰にいた。

首を伸ばして噴水の方を覗き込むと荘厳な装飾が施された馬車が一両とまっており、その横に見たこともない上等な黒い服を着た男が三人の従者を従えて立っている。

（あの方がレフィナード様……？）

白い紐でくくられた黒い長髪。眼鏡をかけていて利発そうなのに、精悍な体躯。正面に立つ村人――志願者だろう――を見る目は鋭いのに目を瞠(みは)るほどの色気があった。放たれるオーラは、この村では見たことがない。しかし王子というわりには年齢が少々上のように見えた。三十代前半くらいではないだろうか。

（僕より年下だと思ってた……）

僻地には王子の詳細など噂でも届かない。すべてはケネルの勝手な想像だ。しかし目に映った姿

は堂々としているので、王子で間違いないのだろう。
「そなたも志願者か」
突然聞こえた声に振り向く。しかし誰もいない。
（空耳？）
もう一度顔を広場に向ける。すると今度はすぐ隣――振り返ったのとは逆側――から声が聞こえた。
「聞こえておらぬのか」
「うあっ！」
慌ててそちらを向くと、王子が連れている従者と同じ服を着た男が立っていた。
「あっ……、あ、すみません」
「そなたも志願者か」
同じ言葉をかけられ、慌てて立ち上がり背筋を伸ばす。
「あ、や、いえ、その、でも僕は学がないので」
「学は求めておらぬ。年の頃二十五までの若い男を求めている」
「え……関係ないんですか」
それなら、と思った。どういった仕事をするのかはわからないが、仕送りをすれば両親の生活を楽にしてやることができる。
「識字できなくてもかまわぬ。こちらに来い」
想像もしていなかった展開だ。広場に入ると、野次馬がケネルに視線を向けた。その中をぎく

しゃくとした足取りで従者についていく。
あと少しで馬車というところで、付近にいた村の男が王子に頭を下げて去っていった。
「リゲンス様。もう一人おりました」ケネルに声を掛けた従者が腰を折った。
「ご苦労」
リゲンスと呼ばれたのは、ケネルが王子だと思っていた男だった。どうやら王子ではなかったらしい。
リゲンスがレンズ越しにじっとケネルを見つめた。
（わ、わ、どうしよ……）
まさかこんなことになるとは思っていなかったので、ぼろを着ている。膝は擦りむけて穴が開いているし、上衣は薄く、つぎはぎだらけだ。それでも寒さに震えながら母が縫ってくれたものだし、そもそもかしこまった服など持っていないけれど。
（恥ずかしいなんて思っちゃだめ……）
しかしリゲンスの視線を感じている間に頬が熱をもっていった。きっと何も言われないのは断り文句を考えているからだろう……志願者かと尋ねられた時に「違います」と答えなかったことを悔やむ。
「……名は」
「え？」
伏せていた顔を上げる。視線が合った瞬間、胸

の疼きを感じた。遠目からでもわかった色気がケネルの全身を包んでいく。
「名は何と申す」
「あ、け、ケネルです」
「ケネル。こちらに」
リゲンスがくるりと背を向け、馬車に乗り込んだ。
（え、なんでっ）
まさか召し抱えてもらえるのだろうか。それとも単に、全員が中に呼ばれたのか。胸に宿った燃えるような熱を逃がすべく深く息を吐き出し、後に続く。
馬車の中は暖かかった。座る場所には動物の毛皮が貼られていて、触れるだけでふわふわのそれを潰してしまいそうで怖い。
「座りなさい」
「は、はい。失礼します」
馬車の中は二人だけ。リゲンスの正面に、ごめんね、と心の中で呟きながら腰を下ろす。その間もリゲンスはケネルをじっと見つめていた。
落ち着かない気分で服の裾を伸ばし、膝の穴を隠そうと試みる。
「ケネル。特別侍従の仕事がどのようなものか想像できているか」
「え……いえ、すみません……」
消えてしまいたいほど恥ずかしくなった。その

つもりはなかったものの、結果としては何も知らずに名乗り出てしまったようなものなのだ。
　きっとこの毛皮だって、こんな貧民に座られることなんて想像もしていなかったことだろう。それに臭いだって染みついてしまわないか、今さらながら気になってしまう。だって最後に風呂に入ったのは、何日も前のことだ。
「役が決まるまでは詳細を伝えることができない。ただ、ケネル。そなたは女を知っているか」
「女……ですか。母はおりますが、姉妹はおりません。近所には――」
　話を遮るようにリゲンスが首を振った。「年はいくつだ」
「二十一です」
「では、女を抱いたことはあるか」
「えっ」
　女を抱いた、とは、性交をしたことがあるかということだろうか。そんなことあるはずがない。
「どうなのだ」
「あ、ありません」
　そもそもこの国では男女のどちらもが純潔である時のみ婚姻が認められる。離別することもできるのだが、その後婚姻することは叶わない――それらの決まりを作ったのは王族だろう。
（婚姻しているかって訊けばいいのに……）
　中には婚姻の定めを守らない不貞な者もいる、

ということだろうか。
「誠か」
「はい」
「よし。男も知らぬな？」
少し意味を考えたが、女と同じ意味だろう。知りません、と首を振る。
「特別侍従の任期は約三か月だ。その間とその後一生、そなたとそなたの家族の生活が保障される」
「保障……」
「衣食住に困らぬという意味だ」
「え……！　三か月で、ですか」
リゲンスは鷹揚に頷いた。
「特別侍従として不在にしている間は、城の者がそなたの代わりに家の仕事を行う」
（すっごい……）
さすが王子の侍従だ。しかしいったい何をするのだろう……でも多少厳しくても三か月で生活に困らなくなるのなら、きっと両親も行ってこいと言ってくれるだろう。
「ただ、男根を失う」
「……え？　だん……？」
両親のことを考えていたので聞き間違えたのだろうか。しかし、リゲンスはケネルが聞いていたとおりの言葉を繰り返した。
「男根を失うと言ったのだ」
「え……」

唐突な言葉に、頭が回らない。

（男根を失う……って、え、男根を取られるってこと……？）

しかし生活に困らなくなるという方が魅力的に思えた。それにここまで話してくれているのだから、ケネルにも召し抱えられる可能性があるということだろう。

「期間中は子種を出すことも許されない」リゲンスは真剣な表情で続けた。「そして、これまで特別侍従になった者で女と婚姻した者はおらぬ」

「婚姻……」

男根がなければ子を成すことはできない。そのような家に嫁ぎたいと言う女はいないだろう。

しかしそれは、ケネルにとっては特に障害になるものではなかった。

「どちらも問題ありません」

ケネルがきっぱりと言い切ると、それまで表情を変えることのなかったリゲンスの目がわずかに大きくなった。

「どちらにしろ、僕のこの貧しさでは来てくれる者はおりません。女性に好まれる体躯もしていません」

家の仕事のほとんどをケネルがこなしていたが、どうにも筋肉がつかなかった。食糧が不足しているので太ることもない。身長も低いので子どもと間違えられることも多々あった。

「だが男根を失うんだぞ。女を娶(めと)りたいとは思わぬのか」
「仕事が忙しく、女性といい仲になったこともありません。ですから両親を幸せにすることができればかまいません」
　それに、と内心で付け足す。もともと性欲は強くないので、しばらく絶頂することが許されなくても支障はありません。
「……わかった。では一晩よく考えて、受けるようなら明日のこの時間、またここに来なさい。荷物は何も持たなくてよい」
「え……それは……」
「そなたを特別侍従として召し抱える。しかし家族にも決して詳細を話してはならぬ。ただ、気持ちが変わらぬのなら城で仕事をすることになり、三か月の間は城の者が代わりに来るということだけ告げなさい」
「あの、生活の保障のことは……」
「それは伝えてかまわぬ」
「はい！　ありがとうございます！」
　リゲンスは一晩よく考えるように言ったけれどケネルの気持ちは決まっていた。だって断るなんて選択肢はない。
　ケネルは家に帰るとすぐ、リゲンスに言われたとおりに事の顛末を話した。両親は突然のことに戸惑いながらも、生活が保障されるという言葉を

聞いて首を縦に振った。
　そうして、ケネルが特別侍従として城に入ることが決まった。

2．初めての城

　村から城へは馬車で一日半もかかった。
　しかしふわふわの毛皮のおかげで尻が痛くなることはなかったし、途中で寄った宿屋では触れたこともないような柔らかいベッド――その呼び方すらリゲンスに教えてもらった――に寝転がり、飯屋では食べたことのない肉や野菜のたっぷり入ったスープに感動していたので、あっという間に感じられた。
　興奮によって昨夜あまり眠れなかったケネルは、心地よい揺れにうとうととまぶたを落としていた。しかし、外から聞こえてきた賑やかな声に目を覚ました。ハッとした瞬間、リゲンスと視線がぶつかり合う。
「ぁ……すみません」
「もうすぐ着く」
「はい」
　外に視線をやると、活気あふれる街が見えた。
「わ！」
「城下町だ」
「これが……」

ケネルの村には、月に一度城下町からの商人がやってきた。子どもたちはその男から話を聞くのが好きでいつも群がり、商人は「これじゃ商売にならん！」と声を上げながら、それでも都会の話をたくさんしてくれた。

「城に着く前に、注意をしておく」

「はい」

正面に座るリゲンスに向き直り、背筋を伸ばす。

「仕事については決して他言してはならない。詳細は部屋に入ってから話すが、それだけは覚えておくように」

「わかりました」

ドキドキした。男根を失う痛みを想像すると怖いけれど、今は見知らぬ世界に足を踏み入れたような、村長が話してくれた冒険譚の主人公になったような気分だった。

馬車が速度を落とした。思わず外を見る。

「これがヒュース王国の城だ。ここは裏門だが、表に回れば大きな門がある」

〜〜略〜〜

3．仕事始め

あまりの眠気に頭がくらくらしている。

ケネルは額を手で押さえながら、ゆっくりと

ベッドを下りた。
　新しい寝床はふかふかと柔らかく、ケネルが寝転ぶと体を包むように沈み込んだ。しかしそれを快適に思ったのは最初だけで、寝返りを打つ度に体が揺れ、まるで風邪をひいた時のように胸にもやもやしたものが広がってうまく眠れなかったのだ。
　そのせいでおいしいはずの朝食も味わえないまま、なんとか元気な表情を作っていたが――。
「どうした」
「え？」
　顔を上げると、リゲンスは食事の手を止めていた。
「口に合わぬか」
　給仕人たちの空気が張り詰めたのがわかった。吐き気に耐えながら慌てて首を振る。
「いえ……とてもおいしいです」
「ではどうしてそのような顔をしている」
　言いながら、リゲンスが給仕人に視線をやった。待機していた全員が一礼して食堂を出ていく。
　二人になると話すしかなかった。ケネルのせいで料理人たちが叱られるようなことがあってはならない。まあ、ケネルが口に合わないと言ったところで貧乏舌だからだと言われるだけのような気もしたが。
「あの、実は……」

昨夜のベッド事情を話すと、リゲンスは顎をさすった。しばし沈黙し、それから口を開く。
「硬いベッドを用意させよう」
思わず目を見開いた。吐き気などどこかに吹き飛んでしまう。
「そのようなことは！　僕が上等なベッドに慣れていないだけですから」
これからは床で寝ればいいのだ。現に、昨日の夕食前の時間は床で寝ていた。その時はベッドを汚してしまいそうだからという理由からだったが、敷物のある床はケネルの家の布団よりも柔らかく、その下の床の硬さが心地よかった。
「気分が悪くなるのであれば休まらないだろう。そなたは王子の一生に一度の大切な儀式の一役を担うのだ」
「あ……」
そうだ。成人の儀なんて、言葉にはできないほど大切な儀式だ。
リゲンスがグラスを傾けた。白い布の敷かれたテーブルにそれを戻してから口を開く。
「私はそなたの村に行くまでにいくつもの市街を回った。しかしどこにも適任者はいなかった」
それならなおさら責任重大だ……自分の担う仕事の重さで体が潰れてしまいそうだ。
「今日からは床で休みます。その方が落ち着きますし、慣れています」

しかしリゲンスは納得しなかった。
「成人の儀ではベッドを使う。眠りにつくことはないが、気分が優れなくなるのは問題だ」
「それは――それまでにベッドで過ごす練習をします」
眠らないのであればきっとここまでひどくはならないだろう。それに上等なベッドに慣れてしまうと、三か月後に家に帰ってからがつらい。
ケネルが大丈夫ですともう一度言って頭を下げたせいか、リゲンスはそれ以上何も言おうとはしなかった。
静かな食事が終わり、給仕人に頭を下げてから食堂を出る。リゲンスの後に続いて階段を下り、広い廊下を進んで着いた先は外だった。東棟をぐるりと回った先にある庭の池。てっきり室内のどこかで練習をするのだと思っていた。
しんとしていて、他には誰もいない。この水を使うのだろうか。
「座りなさい」
「はい、失礼します」リゲンスの隣に腰を下ろす。
「仕事自体はそれほど難しいことではない」
「あ、は、はい」
文字の読み書きができないので、説明されたことはすべて頭に叩き込まねばならない。太陽の光を反射させる水面から意識を強引に引き戻す。
「今日から毎日後孔の洗浄と張り型(ディルド)の

挿入をし、男根を受け入れる準備をしながら口淫の練習をする」

リゲンスは淡々と話すが、すべて覚えられるか不安だった。気持ちを引き締めて顎を引く。

「はい」

「後孔がじゅうぶんに広がり、そなたが快楽を得られるようになったところで男根を切除する」

「は……はい」

男根の切除。ここに来たことに後悔はないが、この爽やかな自然の中で聞くと違和感があった。

「傷が癒えるまでは休息だ。張り型の挿入は行うが、体を第一とする」

「ありがとうございます」

まだ知り合ったばかりだが、リゲンスが無理を強(し)いるとは思えなかった。

「わからないことがあれば些細なことでも訊くように」

「はい」

「この三か月――厳密には途中で男根を失うので、おそらく今後一生、これまでのような快楽は得られないものと思いなさい」

「……はい」

もともと性欲は強くない。小さな家で両親と弟と生活していたので、自慰を行うタイミングもなかったのだ。それに生活するのに必死でそんなことは二の次、三の次だった。

「何かわからぬことはあるか」
「――あの」
「何だ」
　リゲンスの口調にも表情にも感情は見えないが、誠実さはあった。何を訊いても、きちんと答えてくれるだろうという信頼感。
「男根を取るのはどうしてですか。その……それが今すぐでないのも」
「すぐに切除しないのは、男の快楽のツボを実感しながら口淫を覚えるためだ。逆に言えばそのためだけに初期は残しておく。しかしそうしている間にも本能的に男根での快楽が欲しくなるだろう。それでは後孔での悦びに夢中になることができない」
　よくわからなかった。ケネルが首を捻ると、リゲンスが深く息を吐く。
「そなたには後孔で快楽を得られるようになってもらうのだ。しかし男根があると、どうしてもそちらで快楽が欲しいと思ってしまうだろう。その邪念をなくすために切除するのだ。だが最初に取ってしまうと、男のいいところがどこだかわからなくなってしまう。だから自身の男根に触れて快楽を得られるところを確かめながら、口で愛撫をする練習をするのだ」
「ああ！」
　ようやく理解した。頭が悪くてすみませんと頭

を下げると、リゲンスはふっと息を吐いた。
「かまわない。学校にも行っていないのだろう。私も簡単な言葉を使うように心がける」
「ありがとうございます」
　思っていたよりも厳しい人ではないようだ。ほっとしたら体から力が抜けた。そういえば、いつの間にか気分もよくなっている。
「後孔で快楽を得られるようになってもらう理由は覚えているか」
「え……」
　突然投げかけられた質問。これまで説明してもらったことを思い出してみる。
（それはたしか……）
「興奮していただくため、ですよね」
「そうだ。だがそれだけではない。レフィナード様に自信をつけていただくためでもある」
「自信をつけていただくため……ですか」恐る恐る尋ねる。
「そうだ。国家存続のため、必ずやご子息をお作りいただかねばならない。そのためには性交の自信が必要なのだ。だからこそ、ケネルには淫らになってもらう必要がある。しかし演技ではいけない」
「気持ちよくなりたくてたまらない、という体にするということですね」
「そうだ」

リゲンスが目を細めて頷いた。今のは笑みだろうか。少しだけ隣から漂ってくる空気が柔らかくなったような気がする。

二度と射精できないかもしれないと思うとつらいが、何より大事なのは家族のこと。こうしている間も生活を守ってくれているとのことだったが、仕事を打ち切られてしまわぬよう心して務めなければならない。

「他に質問はあるか」

「いえ、ありません」

「では部屋に戻り、後孔の洗浄から始める」腰を浮かしかけたリゲンスが動きを止めた。

「リゲンス様？」

「……気分はどうだ」

「あ……」

〜〜略〜〜

突然、後孔にぬるりとしたものが触れた。

「ひぁっ！」

「海藻から取った潤滑剤だ。これを使わないと怪我(けが)をする」

「は、はいっ」

触れているのはリゲンスの指だろう。自分の排泄孔に、身分の高い男が丹念に潤滑剤を塗り込めている。普通なら「自分でしろ」と言われるような

ことだ。しかしリゲンスは己の手が汚れることもかまわず致してくれる。
「っぁ……」
後孔のしわを丸く撫でられると変な声が出てしまう。腕を折り、肘で体を支えながら両手で口を覆う。
「んんぅっ」
「……ケネル」
「は、はい」
体勢を変えてはいけなかったのだろうか。しかしこうしていないと――。
「声は我慢しなくていい。むしろこれからは艶(なま)めかしい声を上げられるようになってもらう」
「……え？」
「成人の儀にわざわざ男を使うのは、王子の貞操を保持するためだ。相手が同性ならば婚姻の条件である純潔には影響しない」
「……でも」
それと発声に何の関係があるのだろう。
「王子が男色であろうとなかろうと、婚姻するのは他国の姫だ。王子は女との行為ができるようになっていなければならない」
また、難しくて理解できなかった。
「え、と……」
「……感じれば女は高い声を上げる。それを聞くことで、男は女が悦んでいることを知る」

「あ……じゃあ」
　あくまでケネルは女の代理ということか。だから女のように艶めかしい声を上げられるようになれとリゲンスは言っている。
「そなたの声は他の男よりも高い。それも選んだ理由の一つだ」
「……はい」
　そうだったのか。それならはしたないとは思わず自由に声を出して、徐々に艶めかしさをまとっていくしかないだろう。
「三か月ある。今は色気も何もないが、成人の儀までにしつけていく」
「はい。よろしくお願いします」
　どうやら、男根を失うことや後孔を広げるだけでは足りないようだ。体は勝手に変わっていくのだろうが、色気は自分の意識から変えていかなくてはならない。
「女のようになる必要はない。男の色気を学びなさい」
「はい」
　幸い、その師範となりそうな人はすぐ近くにいた。初対面の時からリゲンスのぞくぞくするほどの色気にあてられているのだ。艶っぽいオーラを出すことはできなくても、視線や指先の動かし方なら似せることができるかもしれない。
「毎回の洗浄は後孔の状態を確認するためにも私

が行う。腹が緩い時は言いなさい」
「はい。よろしくお願いします」
後孔を撫でる指が止まった。どうしたのだろうと思っていると、つぷ、と中に入ってくる。
「ぁっ……！」
「思っていたより柔軟だ。これならそれほど苦痛なく広がるだろう」
「あ……ありがとうございます」
よかった。ほっと息を吐く。
「今後、ここは排泄孔ではなく性器だと思いなさい」
「性器……」
「そうだ。今後、そなたはここで快楽を得るのだ」
「はい」
それからリゲンスは指ほどの筒を後孔に入れ、そこから湯を注ぎこんだ。
「っあ……」
「熱いか」
「いえ……」
この感覚は何と言うのが正しいのだろう。腹が内側から温められる感じ……言い表す言葉はわからないが、不快ではない。
「気持ちがいい、と言いなさい」
「え？」
「不快だろうが何だろうが、痛くない時は気持ちがいいと」

「あ……はい。気持ちいい……です」
　言ってみると、言葉は胸にストンと落ちた。あながち間違ってはいないようだ。
「そうだ。今そなたは尻から湯を入れられて気持ちがいいと感じているのだ」
「ぁ……」
　わかっていたことなのに、言葉にされると自分の状況が生々しく思い浮かんだ。豪華な湯殿で尻を掲げ、湯を入れてもらっている――……。
「後孔が締まった。それでいい」
「え……？」
「男根は締まりがないと達せない。握って白濁を出したことはあるのだろう」
「は、はい」
　そういえば、強く握ると気持ちよかったような覚えがある。
「今は広げる時期だが、その時が来れば今度はここを自分の意思で締め付ける訓練を行う」
「はい。わかりました」
　広げたり締めたりと忙しい。しかしそれが仕事だ。せっかく召し抱えてもらったのだから、家族のためにも全(まっと)うしなければならない。
　湯が入ると、隣の厠に移った。木の便座に座って用を足すと、リゲンスが脇に置かれた水入りの桶を使ってそれを流す。
（これはどこに繋がっているんだろう……）

ケネルの村では穴を掘って排泄物を捨てていた。臭いが強烈なので極力近づきたくはなかったが、定期的に土を被せることで臭いを抑えることができていた。

「どうした」

「あ、いえ」

これはただの好奇心だ。意識を切り替えて湯殿に戻り、もう一度湯を入れてもらう。

三回も繰り返すと、しくしくと腹が痛んだ。入れられる湯の量が増えたのだ。しかしその排泄をもって、洗浄は終わった。

「ベッドに」

「ぁ……はい」

眠るわけではないのだろう。いつの間にか整えられていた布団の中に入る。

「気分は」

「大丈夫です」

「床の方がよいか」

「……できれば」

リゲンスが頷いたのを見て、ケネルは床に下りた。寝転がると、柔らかな敷物が心地いい。

「尻を」

「あ、はい」

慌てて体勢を変え、四つん這いになって尻を上げると、湯を入れるための筒よりも少しだけ太いものを挿入された。

「張り型だ。これを尻に咥えたまましばらく横になっていなさい」

〜〜略〜〜

5．イけない苦しみ

苦しい。出したい――。

「んっ、ふ、んむ、ン」

「そうだ、それでいい。歯を立てぬように唇を丸め込みなさい」

「ンンッ」

リゲンスに言われたとおりに舌を動かす。

初めて張り型を口にしてから、もう一週間が経った。

どれほど練習をしようと口内が広くなるわけではない。けれどさすがに慣れたようで、リアルな張り型を口に入れる戸惑いはなくなった。愛おしいとも思わないけれど。

「そなたは根元も好きだろう」

「っ……」

「触れてみなさい」

口淫の練習をする時だけは自分の男根に触ることを許されている。それは刺激するためではなく快感を得られる場所を確認するためだけなのだが、興奮が高まりすぎた時は指先が当たるだけでも絶

頂してしまいそうで、そんな時はそれをやり過ごすために手を根元にやっていた。だからどうやらそれで根元も感じる場所だと思い違いをされてしまったようだ。

「口に入らない部分は手でしごきなさい」

「ん、は、んんっ」

指示をされる度に体の熱が高まる。

豪勢な部屋の中でケネルだけが肌をさらし、リゲンスは少し離れたところからボタン一つ外すことなく正装のまま、淫靡(いんび)な指示を飛ばしている――その現実を意識する度に決して許されない絶頂を求め、腰がびくんびくんと揺れてしまう。

「単調な動きではいけない。力加減やスピードを適宜変えながら施しなさい」

口内がいっぱいで返事ができないので、涙がこぼれ落ちないよう意識しながらリゲンスを見上げる。

「……淫らな顔をしている。男根に口内を犯されて感じているのか」

「んふ、ん……」

違う、と首を振る。だってケネルを犯しているのはリゲンスだ。その鋭い視線に射抜かれるだけで体はほてり、男根は蜜を垂らす。しかし当然そんなことは言えないし、ケネルの仕事は艶やかに王子を誘うこと――ケネルがいやらしくなればな

るほどリゲンスの評価が上がるのだ。
（そうだ、仕事だ……）
だから、違うなんて思ってはいけない。今自分は、王子の男根に口内を犯されて悦んでいるのだ。
言葉で答えるため、張り型を口から出す。
「……はい。口の中が気持ちいいです」
答えてすぐにもう一度口に含み、自分の男根を触りたい欲をこらえて張り型をしごく。
どうして絶頂を求める自分の男根ではなく、体温もない張り型を扱いているのだろう……。
舌を動かしながらしゅっ、しゅっと竿をこすっていると、このまま続けていては自分の体がおかしくなってしまうような気がして怖くなった。
（出したいっ……！）
もう限界だ。射精したい。張り型ではなく、自分の男根を思い切りこすりたい。
触れてしまおうか――震える手をそっと張り型から放そうとした時だった。
「――そこまで。今日はこれでしまいだ」
（ぁ……）
リゲンスの手が後孔に入った張り型を握った。ずるずると抜かれると、後孔が勝手に引き止めようとしてしまう。
「力を抜きなさい」
「や、あの、その、勝手にっ……」
「ああ……ここも淫らになってきたな」

リゲンスの指が後孔のシワを撫でた。そこに触れられたのは久しぶりだ。下腹部がきゅーっと締まるのを感じる。

「……この後孔なら王子もきっとお悦びになるだろう」

「っ……」

王子という言葉を聞く度に胸が苦しくなる。三か月後には顔も見たことのない王子に――。

「だが、口淫はまだまだだ。それに後孔もまだ狭すぎる」

「はい」

成人の儀を終えれば村に帰れる。だからそれまでの我慢。最初はそう思っていたはずなのに、今ではこの時が続けばいいと思っていた。絶頂を許されない苦しみは耐えがたいが、それよりもリゲンスとの時間を過ごせることの方が――だから、まだ未熟だと言われるとほっとしたような気持ちになってしまう。

「明日、張り型の太さを変える。寝る前に後孔をマッサージしておきなさい」

「……はい」

しかしケネルが順調にこなせればリゲンスの仕事が楽になる――頑張りたい。

相反する自分の気持ちに蓋をして足を開き、膨らんでもなお小さな男根が貞操帯に戻されるのを眺めた。

眠れない。男根が起ち上がろうとしているのに、それが金属によって阻まれ痛みをもたらしている。

快感が欲しい。思いきりこすって激しく射精したい。中が空っぽになるまで白濁を撒き散らしたい。

ここのところ、気が付くとそんなことばかりを考えている。

唯一その苦しみを忘れられるのは土いじりをしている時だけだった。しかしこの数日は畑にいても丸みを帯びた野菜を見るだけで後孔に入れて激しく抜き差しをしたいと思ってしまうようになった。

息が苦しい。出したくてたまらない。

しかしそれをしないことを約束にケネルは今ここにいるのだ。

「はぁっ……ああ……」

苦しい。男根が壊れてしまいそう。一度でいいから……もう二度と射精は望まないから、今だけどうか射精させてほしい。

「リゲンス様っ……」

部屋に伺っては迷惑だろうか。せめてこの気持ちだけは知っておいてほしかった。苦しくて痛くて夜も眠れず、朝日が昇るのを待つ間にいつの間にか眠りに落ちているという日々を過ごしているということを――しかしリゲンスは知っているは

ずだ。わかった上で貞操帯を嵌め、切除すると言っているのだ。

射精できないことがまさかこんなに苦しいだなんて。こんな状態で男根を失ったら心が壊れてしまいそうだ。村に帰った後も仕事が手につかず、失った男根を思いながら諦めることのできない欲に涙を流す日々を送ることになるだろう。

どうしてあの時広場に行ってしまったのだろう。あの時あそこに行かなければ、こんな苦しみも知らず、涙を流すこともなかったというのに。

男根の疼きに耐えることができない。貞操帯越しにそっと触れてみる。しかし男根に触れた感触も手に触れられた感触もなかった。

「ああ……」

こんな苦しみがこの世にあるなんて。諦めた方がいいとわかっていながら、それでも射精欲を消すことができない。体にこもった熱をごまかすように下腹部を撫でる。その手は勝手に胸に向かった。本能だった。そこで快感を得られるかどうかなど考えたこともなかったのに、指は小さな乳首に触れた。その瞬間、電気が走ったような快感を得る。

「あああっ！」

男根の刺激とはまったく違う。しかし乳首をいじると、そこで生まれた快感が体内を通って男根に向かう。

「あっ、はっ、ああっ！」

〜〜略〜〜

「なんだ」

「成人の儀について教えてください。僕は何をどうしたらいいんでしょうか」

　返事が来るまでに少しの間があった。

「……成人の儀は成人の間というところで行われる。最初にケネルがそこに入り、次に立会人が来る。それから床に膝をつき、頭を下げて王子の入室を待つ」

「立会人、ですか」

「宮廷長官や各長だ。執務長や税長、騎士団長とか、だいたい十人くらいか」

「そんなに……」

「始まってしまえば気にならない」

「……はい」

「王子への挨拶の文言はその時に教える」

「はい」

「その後は王子と共にベッドに上がり、愛撫をし合いながら行為をする」

　漠然としている。しかし王子の動き次第ということだろう。

（緊張してきちゃった……）

　でもそのおかげで、胸の切なさはいくらかまし

になった。
「それから、王子が本当に射精できているか立会人に確かめさせる必要がある。王子が絶頂した時は後孔から子種を出しなさい」
「その出し方というのは――」
「王子の子種に触れぬよう、手を使ってはならない。自分の力だけで出すのだ」
「あ、え、それって……」ストレートには言われなかったが、排泄の要領で、ということだろう。「わかりました」
　ケネルが顎を引くと、リゲンスもゆっくりと頷いた。
「最後、王子が満足なされば成人の儀は終了だ」
「満足……」
　していただくことができるだろうか。正直、今は不安しかない。それに自分で話題を振っておきながら、やはり成人の儀の話をリゲンスから聞くのはつらい。
「ケネルなら大丈夫だ」
　そうやって認められるとなおさらだ。リゲンスはケネルが王子に抱かれることを望んでいる――そもそもそれが仕事なのだから当然だけれど、それでも切なくて泣きたくなってしまう。
「その場には私もいる」
「え……」
「私も成人の儀を見守っている」

好きな人に見られるのか。好きな人の視線を浴びながら他の男の人と行為をするのか。
「……はい」
張り裂けそうな胸に両手をあてて苦しさをやり過ごす。最初からわかっていたこと。その条件で、将来の生活が保障されるのだ。
「ケネルの体は魅力的だ」
「ぁ……」
リゲンスに手を取られ、心臓がドクンと跳ね上がる。
「ふっくらとした唇。桃色の膨らんだ乳首。張り出した腰骨。その中心にある小ぶりな陰嚢。淡い色の男根がなくなるのは残念だが、それを失ってもケネルの魅力は変わらない」
「リゲンス様……」
触れられているところが熱い。そこから熱が全身に広まっていく――そう思ったのに、リゲンスの手は名残を惜しむ様子もなくスッと離れた。
「きっとレフィナード様も夢中になられることだろう」
「はい……そうなっていただけるように頑張ります」
――好きだと、言えたらいいのに。
会釈をするように頭を下げ、リゲンスから見えないところで唇を噛んで涙をこらえる。そうしながら鼻で深く息を吸うと、いくらか気分は落ち着

いた。
「男根を見せてくれ」
「え……あ、はい」
　これほど経ってもリゲンスに体を見られるのは恥ずかしい。それでももうすぐなくなってしまう男根だ。確かに存在したことを、リゲンスに覚えていてほしかった。
　衣類を脱ぎ捨て、必要もないのに足を開く。目を閉じて顔を背けると、リゲンスが体を起こす気配があった。中心にある金属に鍵が差し込まれる。
「あ……」
　思わずそこを見てしまった。
　貞操帯が外れると、リゲンスは口を閉ざしたまま真剣な瞳でそこを見つめた。
（しっかり見てくれてる……）
　まるでケネルの男根を目に焼き付けようとしているかのよう。その熱い視線で焼き切ってくれたらいいのに。そうしたら……その痛みにならきっと耐えることができるのに。
「ケネル」
「……はい」
「自身の男根の良いところは覚えたか」
「はい」
「触れてみなさい」
「はい」
　まだ男根は少しも膨らんではいない。けれどリ

ゲンスの命令で男根に触れるのだと思ったら、それだけで血が集まり始めた。刺激しすぎないようそっと握り、一番好きな裏筋の部分を人差し指の腹で静かにこする。
「ぁっ……」
「そこが一番良いのか」
「はい。ここをこするとお腹の奥が引き締まるような感覚があります」
なんていやらしい行為なのだろう。好きな人の前で性器に触れ、いいところを言葉で伝えている。
「次に好きなのはどこだ」
「ここです」
先端に人差し指を触れさせた。いつの間にかそこはぬるぬるしたもので濡れている。
「穴が好きか」
「はい。指をめり込ませるように押し付けると、それだけで白濁を漏らしそうになります」
「愛らしい男根だ」
「っ……リゲンス様っ……」
男根を失う恐怖や不安は確かにあるのに、息の仕方さえ忘れそうなほどの幸福が胸を満たした。
「どうした」
好き、と言いたい気持ちを懸命にこらえる。
「……男根が」
「男根がどうした」
「痛いです……」

勃起してからまだ時間も経っていないというのに、もう射精したくてたまらない。この熟れた男根から白濁をこぼすところを見ていてほしい。じっと近くから、においまで感じ取りそうなところから見て、一生覚えていてほしい。

〜〜略〜〜

16．本番前日

「レフィナード様」
「ああ……」
王子の性欲はもう限界のようだった。しかしあと二日でそれを発散することができる。
「本日は成人の儀についてご説明申し上げます」
「やっと楽になれるのだな」
「さようでございます。流れをご案内いたします」
「ああ」
聡明で理性的な王子でも、正体のわからぬ欲に抗い続けねばならぬのはつらかったようだ。もっと勇んでくるかと思ったが、レフィナードは力なくベッドに腰を下ろした。
「成人の儀の後、レフィナード様には婚姻の予定がございます」
「わかっている」

「そして、子どもを成していただかなくてはなりあません」
「当然だ」
　婚姻の相手も選べないというのに――しかし幼い頃から王位継承者として育てられてきたレフィナードに、自由恋愛の言葉はない。
「その行為の練習、と思っていただければ」
「子を成す行為の練習か」
「さようでございます。レフィナード様がお苦しみなのは、男なら誰しもが持つ『射精欲』によるものです。男根の辺りが苦しくていらっしゃるでしょう」
「ああ……いったん膨らみ始めると、もう何も考えられなくなる。この忌々しき枷のせいで痛みもある」
「はい。その男根を――枷を外して自由に膨らんだ男根を相手役の後孔に挿入し、欲を発散していただきます」
「後孔？　そこは排泄孔だろう」
「さようでございます。ですが、しっかりと洗浄をいたしますし、一目見ただけで男根が膨れ上がるような様相をしております」
「……そうか」
　曖昧な返事だった。きっともう、楽になれればどうでもいいのだろう。
　明日になれば――。

（ケネル……）

リゲンスの思いは複雑だった。しかし大切な儀式。失敗は許されない。

「男根を挿入しましたら、抜き差しをするように腰をお振りくださいませ」

「腰を振る……」

「おそらく、本能に任せれば勝手に動くかと存じます」

「あいまいだな」

「儀式のための練習、ができないものでございまして」

「徹底しているな」

「申し訳ございません」

「謝るな。リゲンスが悪いわけではない」

本当にできたお方だ。まだ二十歳だというのに、己を抑える術に長(た)けている。

「男根が硬くならない場合は、相手役が愛撫いたします。触れられている間に自然と硬くなり、挿入ができるようになりますのでご安心ください」

「わかった」

「最低二度、男根から白濁を出していただきます。尿が漏れるような感覚と思われるかもしれませんが、そのまま出していただいてかまいません」

「ああ……」

「一度後孔内に出されましたら、男根を引き抜いてお待ちください。相手役はレフィナード様の子

種――射精によって吐き出された白濁を立会人に確認させます」
「そうか」
　投げやりだった。しかしきちんと頭には入っている。そういうお方だ。
「行為については以上になりますが……相手役に男根はございませんので、驚きになられませんよう」
「……は？」
　そこでようやく王子の目がリゲンスをとらえた。
「どういうことだ。相手は女か」
「いえ、男でございます。男根は切除いたしました」
「なに……？」
「陰嚢は二つ残っておりますが、男根はございません。男根のあったところに小さな穴があり、そこから愛液が漏れるようになっております」
「なぜそのようなことを……？」
「決まりですので」
「聞いたことがないぞ」
「こちらをご覧ください」
　鞄から取り出した羊皮紙を差し出す。
「ヒュース王国　直系継承伝　機密一条……？」
「はい。王と王位継承者、成人の儀の教育者のみが閲覧できる文書でございます」
「……男根を失う……確かに書かれている。だが

そんなことをすれば痛みがあるだろう」

「もう回復しております」

返事はなかった。心根が優しいのだ。自分の儀式のために男根を失った男がいることに心を痛めている。

「相手役は男根がなくとも、快楽を得ることは可能でございます。レフィナード様はどうかご自身の苦しみをその体内で発散させ、レフィナード様のためだけに作られた性器の感触をお楽しみください ませ」

レフィナード様のためだけ――自分の発言が胸を貫く。

王子は何も言わずに羊皮紙を置いた。その表情に先ほどまでの苦しみはない。楽になれるという安堵からなのか、それとも自分より苦しんでいる者がいると知って気持ちを切り替えたからなのか、その心の奥は覗けない。

「……では明日、定刻になりましたらお迎えに上がります」

本文 330 ページ（一段組）

13 万 5 千字。

西洋・性教育・性指導・ディルド・フェラチオ・溺愛・公開セックス・王子・グロなし・陰茎切除・人体改造・青姦・腸内洗浄

PDF（縦・横の２種）とEPUB（電子書籍）の同梱です。
安定のハピエンです！
どうぞよろしくお願いいたします。

成人の儀―特別侍従―　サンプル

©gooneone（ごーわんわん）
2022/ 8/ 16
メール:gooneonegooneone@gmail.com
pixiv：19591291
Twitter:@gooneone11

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。
※この作品はフィクションです。
　実在する人物、団体等とは一切関係ありません。